| | |
|---|---|
| Title | 巻頭言 『オバマを読む』を読む |
| Author(s) | 高橋, 義文 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.3, 2013.3 : 1-1 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4487 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 巻頭言

## 『オバマを読む』を読む

バラク・オバマアメリカ大統領が再選を果たし、政権第二期が主要閣僚を変えてスタートを切った。だが、第一期初期の熱気は見られない。「色あせたオバマ」と感想を述べたわが国の識者もいる。とは言え、アメリカがこの大統領を《再び》選んだという事実は、軽視するわけにいかないであろう。

数年前の熱気が急速に冷え、オバマが、議会の保守派との苦しい戦いを余儀なくされ、早くも再選への否定的な予測さえ人々の口に上り始めていた頃、ひとつの特異なオバマ論が上梓された。ハーバード大学の思想史家ジェイムズ・クロッペンバーグによる『オバマを読む』（James T. Kloppenberg, *Reading Obama—Dreams, Hope, and the American Political Tradition,* 2010. 邦訳は2012年２月）である。

その主張は次のようなものであった。オバマは従来のコンヴェンショナルな政治家と異なり、深みを持った思想家であり哲学者である稀有な大統領である。しばしば賞賛されるオバマの姿勢、たとえば対立を解決する和解への飽くなき追求、その並はずれた自制力と沈着な態度といったことは、生来の気質に由来するのではない。むしろ、その思考法、すなわち、「デモクラシーを熟議として捉える見方」、「哲学的プラグマティズムに対する的確な理解」、「キリスト教的リアリズム」、「歴史は曖昧さとアイロニーに満ち満ちているために、政治の世界を航行するための最良の舵となるという洗練された歴史観」に根差すものである。そしてその基調は、ジェイムズやデューイからロールズやローティにいたる哲学的プラグマティズムの伝統だという。

クロッペンバーグは、オバマの背景をなす思想の起伏を歴史家らしく要を得てたどり、そこからオバマが何をどのように学んだかを豊かに明らかにした。オバマの特質は、その哲学的伝統から善きものを豊かに学び、身に付けた結果なのである。

その主張のなかで、今ではある程度知られるようになった、ラインホールド・ニーバーのオバマへの影響にも触れ、オバマにおける「ニーバー的調べ」（Niebuhrian chords）に注目する。しかし著者は、近年ニーバーを評価し引用する人々が、ニーバーが「恩寵」について書いていることに注意を払わず、ニーバーの複雑な思考を単純化していると批判し、その上で、オバマが支持し、それに精通しているのは、「ニーバーの複雑に構成された思想」であったと指摘した。それを踏まえてであろう、漠然とニーバー的リアリズムと見なされもするノーベル賞受賞講演で国際的に提示されたのは、むしろ「オバマ特有の懐疑と信仰のまれな組合せ」であったと主張するのである。

『オバマを読む』は、出色のオバマ論と言って良いように思う。もちろん、幾多の疑問も覚える。実際、評価と共に厳しい批判にもさらされた。いわゆる保守派からの行き過ぎた批判はさておくとして、多くなされている次のような批判はおそらく当を得たものであろう。すなわち、この書はオバマの現実政治における失敗について触れていない、議会でオバマが和解どころか分裂さえもたらしていることをどう理解すべきなのか、この書のオバマは現実のオバマと乖離しているのではないのか、という批判である。なるほど、クロッペンバーグの描くオバマ像はやや楽観主義的にすぎるかもしれない。

しかしながら、少なくとも、オバマを、ニーバー的要素を含むアメリカの哲学的プラグマティズムの伝統のなかで解釈するその手法は、一定の説得力をもち、きわめて魅力的でもある。そして、何よりも考えさせられるのは、アメリカが、《この書のようにも解釈される大統領》を再び選んだ、という事実である。そのことに、われわれはもう少し注意を払ってしかるべきではないだろうか。

聖学院大学大学院　アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科長　髙橋　義文